居場所概念の分類と比較

山口綾子

(埼玉工業大学大学院人間社会研究科)

キーワード：居場所，概念，分類

Classification and comparison of the Ibasho concept

Ayako YAMAGUCHI

(Graduate School of Human and Social Studies, Saitama Institute of Technology)

Key Words: Ibasho, concept, classification

目 的

近年、居場所や居場所感の研究が重要視され、盛んになっている。「居場所」とは「いるところ、いどころ」(広辞苑, 1998)という物理的な空間を示す概念であるが、現在では物理的な空間を指し示すだけでなく心理的な意味も表すようになり、非常に多くの場面で使用されるようになった(石本, 2010)。

しかし、この心理的な側面を含めた「居場所」の定義は、いまだ統一しておらず(杉本・庄司, 2006)、研究者によって「居場所」の捉え方はさまざまである。

そこで本研究では、「居場所」の概念をより明確にすることを目的とする。具体的に研究1では、杉本・庄司(2007)の「居場所」研究の分類を参考にし、あらためて「居場所」の概念を分類することを目的とした。さらに研究2では、研究1で分類した心理的空間の概念と2008年～2011年までの研究の心理的空間の概念を比較検討することを目的とした。

方 法

杉本・庄司(2007)の研究を参考に「居場所」の概念を物理的空間と心理的空間の2つに分類した。さらに、最近の研究から「居場所」の概念を検討する為に、2008年～2011年までの文献を取り扱うことにした。文献検索の対象範囲は、国立情報科学研究所のNII論文情報ナビゲータ(CiNii)を使用し、タイトルかキーワードに「居場所」が含まれるもの、「居場所」に関する書籍と「居場所」の研究で重要と考えられる学会発表論文の発表論文や大学紀要なども対象とした。

結果と考察

1. 「居場所」の概念の分類

物理的空間として三本松(2000)は、「場所の空間性」と「場所の社会性」の要素が個人にとって意味があると居場所が確保されると考えている。稲葉ら(2001)の研究では中学生を対象とし、居場所を持つことが中学生の学校適応感に影響を及ぼすのかを検討した結果、学校内のお気に入りの場所が一つか皆無である中学生群は、学校適応感が低くなることが示唆されている。檜皮ら(2002)は、居場所の有無と高校生の学校生活適応感との関係について検討した結果、学校の内外に居場所を持つ者は、学習や進路面での安心感がより高く、落ち着いて学習に取り組める可能性があることを示唆している。

心理的空間として安齋(2003)は「居場所」に内在する2つの方向性を見出した。一つは、自己像を修正し自立していき、自己発揮する「居場所」である。もう一つは、逃げ場としての心の安定を図れる場としての「居場所」である。田島(2000)は、居場所は自分らしくいられ安心できる場であり、自分が必要とされ、役に立っているという感覚を持っていることが重要であると結論している。松田(1999)によれば居場所とは、単なる物理的な場所のことではなく、その場にいることによって感じられる心理的な居場所といえるものも含んでいる。

居場所感を構成する要素として、「リラックス」「やりがい」「プライベート」を挙げている。

以上のことから、居場所を物理的空間と心理的空間で分類すると、物理的空間のみか心理的空間のみの片方だけを示す概念は少なかった。このことより、物理的空間を居場所と捉える際であっても、物理的空間に対する心理的空間は、物理的空間と切り離せないことがわかった。

2. 2008年以降の心理的空間の概念

則定(2008)は、心理的居場所を「心の拠り所となる関係性、および、安心感があり、ありのままの自分を受容される場」と定義している。さらに則定は、「本来感」「役割感」「被受容感」「安心感」の4因子からなる心理的居場所感尺度を使用し、青年期を対象とした調査も行っている。石本(2010)は、これまでの居場所に関する実証的研究とは異なる立場をとり、教育臨床や心理臨床の領域から「ありのままにいられる」とことと「役に立っていると思える」ことから居場所を捉え、居場所感の測定を行っている。荻野(2008)によれば、人は自分の“片寄った”心を“フラット”な心に、等身大の自分に取り戻せる人間関係が「心の居場所」に必要であるとし、お互いに信じて向き合うことなくしては「心の居場所」にはならないと述べている。

3. 心理的空間の概念比較

杉本・庄司(2007)の研究を参考にして分類した心理的空間の居場所概念と、2008年以降の研究の心理的空間の居場所概念を比較検討した結果、「居場所」の概念には①心の拠り所で心の安定が図れたりすることで、ありのままの自分であられ②自分が必要とされ役に立っていると思えることで自分が受け入れられていると感じる③自己受容されていると思えることで自己肯定感を高め、自己発揮でき④自分と向き合うことで、片寄った心をフラットにし、等身大の自分を取り戻せる、という4つの特徴が見られた。さらに、その特徴の中でも④の荻野(2008)の概念は特に重要であると考えられる。その理由として、私達が日々生活をする中で時には自分が「苦しいな、辛いな」と考えていても何かを行わなくてはならない場合もある。このような苦しい時に、苦しいことを誰かに聞いてもらっただけでも、気持ちが落ち着き、冷静に自己を見つめられ、居場所において等身大の自分を取り戻すことができるのではないだろうか。

以上のことから、等身大の自分を取り戻すことができる居場所は、居場所の機能として安全基地のような意味を持っているのではないだろうか。

今後は、上述した「居場所」の概念の4つの特徴をふまえ、居場所の定義を検討していきたい。

引用文献

安齋智子(2003)。「居場所」概念の変遷 発達, 24, 33-37.
(その他の引用文献は発表時に提示)